

# 大学新生における適応感の検討

## Investigation of Freshman's Adjustment to College Life

山田 ゆかり

Yukari YAMADA

大学生の不適応の問題については、従来より指摘されてきた大量留年やスチューデントアパシーといった大学生特有の問題に加えて、これまで中学生・高校生を中心に見られたような不登校を中心とする現象の拡大がみられる。高校までの発達課題が達成されないまま大学に移行し、適応に大きな困難を抱える学生が増えてきているといえる。

とりわけ大きな環境の変化を経験する入学直後の時期には多くのストレスが存在する。大学への適応にとって、1つの「ヤマ場」ともいえる重要な時期である。この時期の問題のひとつに不本意入学と入学後の不本意感があり、出席放棄（不登校）につながりやすく、やがて休学や早期の進路変更（転学、退学）となっていくのである。こうした状況の中で、学生相談活動においても、一般的な学生の心理的適応にこれまで以上に配慮し、個別的な心理相談にとどまらず、適応への多様なサポートを実施して、不登校・退学を防ぐことが必要な局面となってきている。

本稿では、大学新生に焦点をあて、意欲減退傾向と大学生生活不安傾向の2つの側面から大学生生活への適応感を調査した結果にもとづいて、適応の状況と修学状況の動向について検討する。

キーワード：大学新生、適応性、意欲減退、大学生生活不安、学生相談

college freshman, college adjustment, apathy, college life anxiety, school counseling

### 1. 問題

大学生における大学生生活不適応の増加が指摘されてきている。従来、1970年代後半から80年代にかけて盛んに指摘された大量留年やスチューデントアパシーといった大学生特有の問題に加えて、これまで中学生・高校生を中心に見られたような不登校を中心とする不適応状態が大学生にまで拡大しているとも考えられる。大学への進学率が50%を超え、入学試験方式が多様化するなかで、大学生の学力・パーソナリティも多様化し、もはや大学生は「自主的に学ぶ自立した存在」とはいえないような未成熟性を示す場合も多くなって

いるのである。大久保（2005）は、学校への適応感を構成する要因について、中学生から大学生までに共通する要因として、居心地の良さの感覚、課題・目的の存在、被信頼・受容感、劣等感の無さの4つを挙げ、大学での適応感は高校時代の学校への適応感に大きく影響されると述べている。自己不確実感や不全感を抱え、友人や教員との対人関係が築けない、学内での居場所を見つけられないなど、高校までの発達課題が達成されないまま大学に移行し、適応に大きな困難を抱える学生が増えてきているといえる。

とりわけ新生生においては、大学入学を果たしたとい

う思いもつかの間、履修登録、高校とは異なる大学の仕組みの理解、講義出席と課題遂行、前期試験、大学から離れる夏休み、単位取得状況の判明、そして新学期の開始と、多くのストレスサーに対処しながら次々にすすんでいくスケジュールをこなしていくことはなかなか困難な課題であり、この時期が適応への正念場でもある。

大学新生が抱くもうひとつの大きな問題に、いわゆる不本意入学と入学後の不本意感がある。不本意入学とは本人の意に添わない入学のことであり、不適応感につながりやすいことはいままでのない。小林(2000)は、不本意入学には、第一志望不合格型、合格可能性だけを重視して「受かる大学」に入学した合格優先型、自分の興味・適性よりも資格取得など就職の有利さを優先した就職優先型、「自宅から通学できる」「学費が安い」など経済的・地理的事情が優先された家庭の事情型の4つの型があるとしている。また、入学後の不本意感についても多様な要因を指摘している。授業がおもしろくない(興味をもてない、難しい)、履修登録を失敗した、単位がとれそうにない、教員への違和感、自らの適性に疑問が出てきた、情報不足から入学後にその学部・学科では自分がやりたいことができないとわかった等々である。こうした不本意入学や不本意感は、出席放棄(不登校)につながりやすく、やがて休学や早期の進路変更(転学、退学)となっていくのである。大学生の不登校について田中(2000)は、不登校に至った課題内容と背景にある心理状態の二つの側面から捉えることが有効だとしている。さらにこの心理状態には、何か違うというズレの気持ちや大学に入る前に抱いていたイメージと実際の大学生活の差の実感といった「自分のなかの違和感」と、「どこかこの大学に合わない」といった居心地の悪さ、高校までの「生徒」という存在から「学生」に変わることの困難さなど「外的世界との違和感」という内的・外的の2つの違和感を指摘している。内田ら(2002)の国立大学86大学・学部への調査によれば、平成12年度の平均休学率は2.54%(最小値0.5%・最大値17.0%)で平成7年度から急増傾向にあり、平均退学率は1.61%(最小値0.3%・最大値8.3%)で平成6年度頃から増加傾向にあるということである。

こうした不適応増加の状況の中で、「学生相談室」や「カウンセリング・ルーム」といった大学における学生支援のための機関は急速に普及し、現在の設置率は80%を超えている。その活動も、従来の専門相談員

による個別の面接を中心としたものにとどまらず、対人関係を維持し友だちづくりをサポートして、不登校やひきこもり、早期退学を防ぐための多様な試みが行われるようになってきている。その内容は、気軽に勉強したり講義の空き時間を過ごすことのできる「居場所」の提供、グループワークによる「大学生活の過ごし方講座」、生活リズムの確保を目的とする作業療法的なアプローチ、家庭訪問、教員との交換日記までさまざまである。臨床心理士など専門家による支援だけでなく、大学院生・上級生による修学相談・生活相談・補習なども定着しつつある。大学としても、精神病的な問題をもつ学生への対応に加えて、一般的な学生の心理的適応にもこれまでにない配慮し、不登校・退学を防ぐことが必要な局面となってきているのである。また、一方でボーダーラインあるいはそれに近い状態のようなパーソナリティの偏りを示す学生や軽度発達障害の学生など専門的な対応が不可欠の学生も増加しており、必要とされる学生支援サービスは多様化してきている。

こうした問題意識を背景として、著者はこれまでも継続して大学生の適応性に目を向け、自画像による適応性評価の吟味(1996, 2002, 2004)やストレスとコーピングの関連性(2003)について検討を行ってきた。退学・休学の事由としては、「進路変更(検討中)」「経済的理由」などが示される場合が多いが、これらのうちのかなりのものが、不適応感に関連する心理的要因を内在していると考えられる。学生側の申し出のとおり事務手続きを行い、結果として学業継続の可能性のあるケースを大学から放り出してしまうことのないよう、学生の背景にある心理的問題を把握し、適切に対応していくことが必要なのである。本稿では、大学新生に焦点をあてた大学生活への適応感を意欲減退と大学生活不安の2つの側面から調査した結果にもとづいて、学生の適応感の状況と修学状況の動向について検討した結果について報告する。

## 2. 方法

### 1) 調査1：意欲減退度の測定

#### (1) 調査用紙

意欲減退度診断検査(広島大学保健管理センター、1973)から社会的要因による意欲減退にかかわる項目を割愛し、主体的要因による意欲減退および大学環境要因による意欲減退の項目を一部改変して調査用紙を構成した(表1)。項目は、主体的要因(46項目)、大

表1 意欲減退度診断検査項目

## I 主体的要因による意欲減退

- 1 日常生活は興味のあることでいっぱいであ
- 2 疲れやすい方ではない
- 3 これまでと同じように勉強や仕事ができている
- 4 朝はすっきりと気持ちよく目がさめる
- 5 人生は価値のあるものだと思う
- 6 幸福だと感じる事が多い
- 7 遊びやレクリエーションをいろいろ楽しんでいる
- 8 ととき元気な満ちあふれてきて、「やるぞ」という気になる
- 9 体の調子はとても良い
- 10 大騒ぎできるようなパーティーや集まりがとても好きだ
- 11 正しいと思うことは主張すべきだ
- 12 何ごとにつけ自信が有る方だ
- 13 何となく体が弱っているような気がする
- 14 1つのことに集中して打ち込むことができない
- 15 自信欠如だと思う
- 16 このごろ本を読んでも今までのように頭に入らない
- 17 しょっちゅう頭が痛い
- 18 いつも憂うつである
- 19 相手に話しかけれない限り、自分からは話しかけない
- 20 誰も本当の自分を理解してくれないと思う
- 21 これからどう生きていって良いのか分からなくてあせっている
- 22 初対面の人と話をするのは苦勞する
- 23 もめごとが起きた時は、黙っているのが一番良いと思う
- 24 皆と一緒にいても、ひとりぼっちのような気持ちになることがある
- 25 じっとおとなしくしていても別に退屈なことはない
- 26 自分から世話役になるようなことはまずない
- 27 自分は役に立たない人間だと思う
- 28 人から言われたことをすぐ忘れてしまう
- 29 注意を集中するのに苦勞する
- 30 勉強や仕事に専念することはなかなか難しい
- 31 体を動かすより、ぼーっと考え事をするのが好きだ
- 32 何かを始めるのはいつもおっくう(めんどろ)だ
- 33 これまで一度も異性とデートしたことがない
- 34 自分の身なりを気にしない方だ
- 35 できるだけ人混みには行かないようにしている
- 36 人に失望することが多い
- 37 自分自身の本当の姿がわからない。
- 38 しなければならぬと思うが、何をしたらよいか分からない
- 39 私たちは、これといった目的もなく、なんとなく生きやがて死んでいくのだと思う。
- 40 私は心から信頼できる人を持っていない
- 41 毎日同じことの繰り返しで生活に張り合いがない
- 42 人生とはまったく偶然の積み重ねで無意味なものに思われる
- 43 人は結局は孤独なものだと思う
- 44 私は他人のために役に立つような人間になれそうもない
- 45 自分が本当に望んでいる将来がどんなものかわからない
- 46 人生の生き方について、現実と理想の差を感じる

## II 大学環境要因による意欲減退

- 1 この大学は、第一志望だった
- 2 この大学にかなり満足している
- 3 私は本当に入学したいと思っていた大学に入学した
- 4 大学での授業内容に一応満足している
- 5 授業への出席状況は良い方だ
- 6 できれば、他の学科にかわりたい
- 7 本当に信頼できる教員に巡り合えない
- 8 大学で教員と個人的にかかわったことはない
- 9 何となく教員に反発を感じる
- 10 学内にはもっと精神的な支えが欲しい
- 11 大学で、心のふれあう友だちに恵まれない

学環境要因(11項目)の57項目で構成され、回答は「はい」「いいえ」の2件法である。意欲減退傾向を示す方向への回答を各1点とし、意欲減退傾向得点が算出され、この得点が高いほど意欲減退傾向が高いことを示す。この調査は、大学生の不適應傾向を主として意欲減退(スチューデントアパシー)の視点から捉えようとするものである。

## (2) 調査対象

2003年入学の大学1年生225名(情報系学科 135名、管理栄養士課程90名)。

## (3) 調査の実施時期と手続き

2003年6月、調査は、必修科目の講義中に「学生生活に関する調査」として実施した。

当日欠席の学生については、概ね1ヶ月後までを目処に追調査を実施するなどして、可能な限り調査を実施した。最終的な調査実施率は、在籍者の90.0%である。

## 2) 調査2: 大学生生活不安の測定

## (1) 調査用紙

藤井(1998)による大学生生活不安尺度の項目を一部改変して用いた(表2)。この尺度は、

日常生活不安尺度(13項目): 大学生活において一般的に感じる不安

評価不安尺度(11項目): 試験を含め、他人からの評価に対する不安

大学不適應尺度(5項目): 大学に対する違和感・不適應感

の3つの部分に関連する質問項目から構成されている。回答は、「はい」「いいえ」の2件法で求められる。不安傾向に該当する方向への回答を各1点とし、大学生生活不安得点が算出され、この得点が高いほど高不安であることを示す。この調査は、大学生の不適應傾向を大学生生活にかかわる全般的な不安の程度から捉えようとするものである。

## (2) 調査対象

2004年度入学の大学1年生233名(情報系学科100名、社会科学系学科40名、管理栄養士課程93名)。

## (3) 調査の実施時期と手続き

2004年6月、調査は、調査1と同様、「大学生生活に関する調査」として、必修科目の講義時に実施し、必要に応じて1ヶ月間程度の間追調査を実施した。最終的な調査実施率は、在籍数の95.1%である。

表2 大学生生活不安尺度項目

## I 日常生活不安尺度

- (1) 大学で人が自分のことをどう思っているのか、気になる
- (2) 4年間で卒業できるかどうか、不安である
- (3) 留年したらどうしようと、気になる
- (4) 万一事故にあったり、病気をしたらどうしようと心配になる
- (5) 友達と一緒に何かをしなければならないとき、うまく協力できるか不安である
- (6) サークルなどで先輩たちとうまく付き合えるか心配である
- (7) 1限目の授業にきちんと起きて出席できるかどうか、不安である
- (8) 先生が近くにいると気になって仕方がない
- (9) 一ヶ月の生活費が足りるかどうか、心配である
- (10) 授業中、先生の言っている内容がわからず、不安になることがある
- (11) 大学の先生と話をするとき、とても緊張する
- (12) 先生に“研究室まで来るように”と呼ばれたら何を言われるかととても気になる
- (13) 将来、良い就職ができるかどうか、不安である

## II 評価不安尺度

- (1) 授業中に何かしなければならぬとき、ミスをするのではないかと不安になる
- (2) 必修科目の成績が「不可」だったらどうしようと心配になる
- (3) テスト中に時間が残り少なくなると、自分の考えがまとまらなくなる
- (4) テストを受けていて、分からない問題に出会うと、頭の中が真っ白になってしまう
- (5) 成績のことが気になって仕方がない
- (6) 大学の成績のことを考えると、憂うつだ
- (7) 履修登録した授業の単位がきちんともらえるかどうか心配である
- (8) テスト中、緊張して自分の力が発揮できない
- (9) 授業やゼミで発表する時、声が震えることがある
- (10) 卒業研究がうまくできるかどうか、不安である
- (11) テストを受けるとき、悪い点をとってしまうのではないかと心配になる

## III 大学不適応尺度

- (1) こんな大学にいたら自分がだめになるのではないかと憂うつな気分になる
- (2) この大学にいと、何か不安な気持ちになる
- (3) できることなら、転学あるいは転部・転科したくて仕方がない
- (4) 入学した学部・学科が自分に合っていないような気がして不安である
- (5) 大学を退学したいと思うことがある

## 3. 結果と考察

## 1) 意欲減退傾向について

表3は、学科別、領域別に意欲減退度得点の平均を示している。なお、この尺度は、性別による結果処理を前提にしていなため、ここでも性別を込みにして集計を行っている。主体的要因による意欲減退得点、

大学環境要因による意欲減退得点とも学科間に差は認められない。すなわち、平均して、主体的要因については46項目中19項目、大学環境要因については11項目中5項目、両要因を総合してみると57項目中24項目について、意欲減退傾向を示す反応がみられるということである。表4は、全体での平均点±標準偏差をカッティングポイントとして、2つの要因別および総合的な意欲減退傾向の程度別に、意欲減退傾向の低い群、平均的な群、高い群の3群に分類し、人数分布を示したものである。

表5は、この大学入学時に調査を実施した対象学年について、3年次前期終了までの退学、休学、留年等の動向を追跡し、把握できた学生の意欲減退度診断検査の結果を示したものである。ここでまず注目されるのは、調査未実施者が12名と未実施者全体の約半数を占めていることである。意欲減退傾向を検討する以前の問題として、これらのケースでは、講義に連続して欠席したために調査が実施できなかったのであり、入学直後の早い時期から不登校など不適応行動が現れ、結果として退学につながってしまっていることがわかる。この時期での継続的な欠席傾向を軽視せず適切に対応していくことの重要性を示唆するものである。また、もうひとつの特徴としては、大学環境要因にかかわる意欲減退傾向が高いことが認められる。すなわち、不適応感が主体的要因によるものではなく、不本意入学や入学後の不本意感を背景とする大学への違和感として認知されていることが、退学という選択につながっているとも考えられる。これに対し、少なくとも大学に留まっている留年者については、大学環境要因による意欲減退傾向も高いが、加えて総合的な意欲減退傾向が高いことが認められる。留年者も大学に不適応感を持つてはいるが、こうした全体的な意欲減退傾向の高さのために「大学をやめる」という行動化までには至らず、出席放棄やひきこもりという状態に留まっているということができるとも考えられる。

表3 意欲減退度診断検査の学科別平均点(標準偏差)

	情報系 N=135	管理栄養士 N=90	全体 N=225
主体的要因	19.64 (7.59)	18.67 (7.41)	19.25 (7.52)
大学環境要因	4.78 (2.20)	5.06 (2.05)	4.89 (2.14)
総合	24.43 (8.60)	23.72 (8.16)	24.15 (8.41)

## 2) 大学生生活不安について

表6は、大学生生活不安尺度について、学科別・性別の平均点を示したものである。また表中、「大学1年生」として示したのは、本尺度の妥当性検討のために実施された調査（藤井，1998）の結果であり、大学1年生の平均的なデータと考えてよい。このデータと各学科

の結果とを比較してみると、情報系学科では、男女とも日常生活不安、評価不安、総合得点において、いずれも平均より低くなっており、特に女子での不安の低さが顕著である。社会科学系学科男子についても同様に、大学生生活にかかわる不安は全般的に高くないといえる。なお、女子はサンプル数が少ないため結果の記

表4 意欲減退傾向の程度別人数分布

	低意欲減退傾向群	平均群	高意欲減退傾向群
主體的要因	0～11点 30	12～25点 153	26点～ 42
大学環境要因	0～2点 25	3～6点 146	7点～ 54
総 合	0～15点 25	16～31点 156	32点～ 44

表5 退・休学者等の意欲減退度診断検査の結果

No.	経 過	意欲減退度		
		主體的要因	大学環境要因	総 合
1	1年前期で退学	16	7	23
2	1年前期で退学		調査未実施	
3	1年前期で退学		調査未実施	
4	1年前期で退学	23	8	31
5	1年前期で退学		調査未実施	
6	1年後期で退学		調査未実施	
7	1年後期で退学	10	9	19
8	1年後期で退学	15	8	23
9	1年後期で退学	23	8	31
10	1年後期で退学		調査未実施	
11	2年前期で退学		調査未実施	
12	2年前期で退学	10	3	13
13	2年前期で退学	14	4	18
14	2年前期で退学	17	7	24
15	2年前期で退学		調査未実施	
16	2年後期で退学	27	9	36
17	留年決定後、退学		調査未実施	
18	留年決定後、退学		調査未実施	
19	留年決定後、退学	21	6	27
20	留年決定後、退学	17	5	22
21	留年決定後、退学		調査未実施	
22	休学後、退学		調査未実施	
23	休学後、退学	21	8	29
24	休学後、退学	30	6	36
25	留年	24	9	33
26	留年	24	8	32
27	留年	16	3	19
28	留年	34	8	42
29	留年		調査未実施	

注)表中の太字は、平均+標準偏差以上の高得点であることを示す

述を割愛する。両学科での不安の低さはいうまでもなく、大学生活への適応性を示す指標であるが、一方で、不安の低さは意欲や達成動機の低さに関連するという見解もあり、この点については、さらに検討が必要である。これらに対し、管理栄養士養成課程では、男女とも、日常生活不安、評価不安、総合得点において、平均より高くなっており、大学生活にかかわる不安が強いことが認められる。このことは、前述の意欲減退傾向において、情報系学科と管理栄養士課程での差が認められなかったのとは異なる特徴である。管理栄養士課程においては、将来の資格取得・職業選択の目標が明確である。学生にとってはこれが大きな魅力のひとつであろうが、一方でカリキュラムは必修科目中心の自由度の低いものになりがちであり、目標のために継続して努力することが求められる。職業選択の結果と自分の適性との一致について疑問を持ったり、自信が揺らぐこともある。「自分はこの大学(学部・学科)に合わない」「おもしろくない」という違和感ではなく、「ここでやっていけるのだろうか」「やっていかなければならない」という不安感が強くなるということであろう。管理栄養士課程では、情報系・社会科学系学科に比較して退学・休学者は少なく、大学生活不安の強さと退学・休学という選択とは必ずしも関連しないと

いえる。もちろん、退学や休学さえしなければ、大学に適応しているということではなく、重大な不適応感を内在していることもあり、今後なんらかの問題として顕在化する可能性もある。ともすれば目標が不明確になりがちで、自由度の高いことが動因の低下を招き、無関心や無気力が「不安の低さ」として現れる可能性のある情報系・社会科学系の問題と合わせて注意深く対応していく必要がある。

表7は、3つの領域別およびこれらを総合した大学生活不安について、大学1年生の平均点±標準偏差をカッティングポイントとして、大学生活不安の程度を3群に分類し、各群の人数分布を示したものである。まず、日常生活不安について、男子で高不安群が少ないのに対して、女子で高不安群が多いことが認められる。また、評価不安について、男子で低不安群が多くなっている。課題や試験とその評価について、「気にしない」学生が多いということであり、上述の指摘と同様、学習意欲の問題を示唆しているとも考えられる。

次に、表8は、意欲減退度診断検査で示したのと同様に、大学入学時に調査を実施した対象学年について、2年次前期終了までの、退学、休学等の動向を把握できた対象の大学生活不安尺度の結果を示したものである。意欲減退度診断検査と同様、ここでも、調査

表6 大学生活不安尺度 学科別・性別の平均点(標準偏差)

	情報系		社会科学系		管理栄養士		〈大学1年生〉	
	M(N=80)	F(N=20)	M(N=37)	F(N=3)	M(N=23)	F(N=70)	M(N=456)	F(N=406)
日常生活不安	4.88 (2.70)	4.70 (3.29)	4.33 (3.06)	5.67 (—)	6.09 (3.24)	6.79 (3.31)	5.07 (3.73)	5.41 (2.78)
評価不安	4.76 (3.01)	4.05 (2.98)	4.03 (2.72)	6.00 (—)	6.24 (3.22)	6.66 (2.97)	5.57 (2.33)	6.22 (2.60)
大学不適応	0.90 (1.43)	0.75 (1.29)	0.97 (1.36)	0.33 (—)	1.09 (1.37)	0.93 (1.35)	1.14 (1.70)	0.70 (1.08)
総合	10.54 (5.70)	9.70 (6.07)	9.38 (5.17)	12.00 (—)	13.43 (5.95)	14.38 (6.37)	11.79 (5.70)	12.33 (5.06)

注1)〈大学1年生〉は、本尺度の妥当性検討のために実施された関東地区の国立5大学・私立5大学の調査結果(藤井, 1998)からのデータである。

表7 大学生活不安の程度別人数分布

	男子(n=140)			女子(n=90)		
	低不安群	平均群	高不安群	低不安群	平均群	高不安群
日常生活不安	0~2点 32	3~8点 93	9点~ 15	0~3点 21	4~7点 34	8点~ 38
評価不安	0~3点 51	4~7点 59	8点~ 30	0~3点 21	4~8点 45	9点~ 27
大学不適応	0~1点 99	2点 21	3点~ 20	0点 56	1点 7	2点~ 27
総合	0~6点 41	7~16点 79	17点~ 20	0~7点 17	8~16点 42	17点~ 34

未実施者が4名ある。全体の調査未実施者が5%であることからすると、相対的に未実施の比率が高い。やはり、入学直後の早い時期から欠席しがちとなっていることが、結果として早期の退学につながっている。また、大学不適應の不安得点が高いケースが目立つ。この尺度を構成する5項目「こんな大学にいたら自分がだめになるのではないかと憂うつな気分になる」、「この大学にいて、何か不安な気持ちになる」、「できることなら、転学あるいは転部・転科したくて仕方がない」、「入学した学部・学科が自分に合っていないような気がして不安である」、「大学を退学したいと思うことがある」のすべてに「はい」と応答し、大学への違和感を強く感じていることを示すケースが3名ある。これに対して、不安得点が著しく低い（日常生活不安2点以下、総合6点以下）ケースも5名含まれている。これらは、意欲減退型の不適應とも考えられる。なお、今回の結果からは、日常生活不安や評価不安については、退学・休学との明確な関連を指摘することができないが、不適應感の重要な要因であることは明らかであり、さらに、学業成績など修学の状況、現実の大学生活行動、自己効力感や自尊感情などの自己評価といったさまざまな適応指標との関連を検討していく必要がある。

#### 4. 結語

大学新入生を対象に、意欲減退と大学生生活不安の2つの側面から、大学不適應感の実態について検討を行ってきた。

その結果、次のようなことが明らかになった。

(1) 入学直後の早い段階から継続的な欠席（出席放棄）が出現する場合は、これがそのまま退学や休学につながる可能性が高い

(2) 意欲減退については、不本意入学や入学後早期に現れる不本意感を背景とする大学への違和感に関連する意欲減退傾向が不適應行動出現を予測する指標となる。

(3) 大学生生活不安についても、前述(2)の意欲減退と関連する結果が認められ、大学不適應に関する不安が不適應行動出現の指標となることが示唆されたが、極端な不安の低さも意欲低下などの点で問題になる可能性がある。

(4) 退学・休学との関連が明確にならなかった日常生活不安や評価不安についても、修学状況や自己評価などの適応指標との関連を検討していく必要がある。

大学入学直後の学生に対し、不本意入学であるかどうか、実際に始まった大学生活のどこに不満感・違和感を持っているかなどを明らかにしていくことは、大

表8 退・休学者等の大学生生活不安尺度の結果

No.	経 過	大学生生活不安			総合
		日常生活不安	評価不安	大学不適應	
1	1年前期で退学	4	8	5	17
2	1年前期で退学				
3	1年前期で退学	9	7	5	21
4	1年後期で退学	0	1	4	5
5	1年後期で退学	5	6	3	14
6	1年後期で退学	5	2	2	9
7	1年後期で退学	2	3	0	5
8	1年後期で退学	2	1	2	5
9	1年後期で退学	3	6	5	14
10	1年後期で退学				
11	1年後期で退学				
12	1年後期で退学				
13	2年前期で退学	2	4	0	6
14	休学	11	11	1	23
15	休学	4	4	4	12
16	休学	1	0	1	2
17	休学	8	7	1	16
18	休学後、復学	4	3	3	10
19	休学後、復学	12	9	1	22

注)表中の太字は、平均+標準偏差以上の高得点であることを示す

学側にとって取り組むのにかなり抵抗のある課題であろう。しかし、こうした問題に真剣に向き合い、学生の不適応感の構造を明らかにしていくことが、学生の大学生活への満足感を高める方策を探る重要な手段であることは間違いない。退学・休学の事由として、「進路変更（検討中）」「経済的理由」などが示される場合が多いが、これらのうちのかなりのものが、不適応感に関連する心理的要因を内在していると考えられる。これらの要因を看過して、結果として学業継続の可能性のあるケースを大学から放り出してしまうことのないよう、学生の背景にある心理的問題を把握し、未成熟な学生を「大学生」として育てていくことが重要な課題なのである。

## 文献

- ・藤井義久 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68 (6), 441-448 (1998)
- ・広島大学保健管理センター 意欲減退度診断検査 未公刊 (1973)
- ・岸良範 大学休学・留年の現状と対策—学生のメンタル・ヘルスの視点から 青年心理, 89 (1991)
- ・小林哲朗 大学・学部への満足感 小林哲朗・高石恭子・杉原保史 (編) 大学生がカウンセリングを求めるとき ミネルヴァ書房 (2000)
- ・大久保智生 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究, 53(3), 307-319 (2005)
- ・田中健夫 大学生にとっての不登校 小林哲朗・高石恭子・杉原保史 (編) 大学生がカウンセリングを求めるとき ミネルヴァ書房 (2000)
- ・鶴田和美・小川豊昭・杉村和美・山口智子・赤堀薫子・船津静代・鈴木國文 名古屋大学における不登校の現状と対応 名古屋大学学生相談総合センター 紀要第2号, 2-16 (2002)
- ・上地安昭 学生の意欲減退 石井完一郎・笠原嘉 (編) スチューデントアパシー 至文堂 (1981)
- ・内田千代子・中島潤子・野村正文 大学における休・退学, 留年学生に関する調査—第23報—その1 第23回全国大学メンタルヘルス研究会報告書 (平成13年度) (2002)
- ・山田ゆかり・天野寛 自画像による大学生の適応性の検討 名古屋文理大学紀要第2号 3-12 (2002)
- ・山田ゆかり・天野寛 大学生におけるストレスとコーピング 名古屋文理大学紀要第3号 1-11 (2003)
- ・山田ゆかり・天野寛 自画像にみるストレス 名古屋文理大学紀要第4号 3-12 (2004)
- ・山田ゆかり 青年期における自己概念—意欲減退傾向との関連性について(3)— 日本心理学会第60回大会発表論文集 (1996)